

コープ災害ボランティア ネットワークニュース

【第123号】2023年10月

東京都生活協同組合連合会
コープ災害ボランティア
ネットワーク幹事会

TEL : 03-3383-7800

2023年度のCO災ボの活動がスタートしました。スキルアップ講座第1講の実施結果と「令和5年度 東京都・東村山市合同総合防災訓練」への参加についてご報告します。

報告

スキルアップ講座 第1講 8月26日(土)

「災害時の一番の困りごと ト・イ・レを考える」

講師：松本 彰人さん(特定非営利活動法人日本トイレ研究所研究員)



スキルアップ講座第1講として、災害時のトイレの問題と解決策について学びました。会場に59名、オンラインで162名が受講し、後日配信した動画には104回の視聴があり、多くの方が災害時のトイレについて考える機会になりました

地震だけでなく、豪雨災害でもトイレは使えなくなります。最初に「もし、みなさんが今日被災され、もし備えが無かったらトイレはどうされますか？」と講師から投げかけられ、4つの行動から会場は挙手、オンラインは投票を使って選択しました。

- ①仮設トイレを待つ ②がまんする
③その辺でする ④流す水をさがす

どちらの参加者も②と③を選ぶ方が多かったです。

東日本大震災で、発災後何時間でトイレに行きたくなったかを調査したところ(回答36人)、3時間以内31%、4~6時間36%、7~9時間11%、10~12時間11%、13時間以上11%で、6時間以内が約7割という結果であったにもかかわらず、仮設トイレが被災自治体の避難所に行き渡るまでにかかる日数は、3日以内が34%、4~7日17%、~14日28%、15~30日7%、1カ月以上14%(回答29自治体)。また、ライフラインの復旧までにかかった平均日数は(回答29自治体)、上水道が35日、下水道管34日、電気21日かかったそうです。

水や食料よりもトイレを使える環境にすることが大事です。トイレの回数を減らすために飲む量や食べる量を減らすことで、健康被害や災害関連死につながる可能性があります。選択が多かった「その辺でする」

は感染症を広げることになります。また、水を流すには、例えば給水所で手に入れた貴重な飲み水を大量に使うことになり、水洗トイレは下水道の破損で使用できない場合もあります。

災害時のトイレは、すぐに「携帯トイレや簡易トイレ」を使い、「マンホールトイレ」を組み立て、「仮設トイレ」が届く前も、色々なトイレを組み合わせで切れ目のない環境を確保することが大事です。携帯トイレは給水シートや凝固剤で液体では無くしてくれるものです。1日1人5回トイレを使うと考えて、備える必要があります。使用したものを保管する場所、自治体の回収など、あらかじめ確認しておきましょう。

携帯トイレを備えていても、実際に使ったことがある方はわずかでした。家庭や活動の場などで、ぜひ一度実験してみてください。



トイレの実験



透明カップに凝固剤(粉末)を入れ、水をいっぱい注ぐと、混ぜなくても硬く凝固してしまいます。自宅のトイレに袋をかけて使うと便利です。

参加者の関心が高かった、堆肥になるおがくずトイレ

受講者のアンケートから：「食料や水は備えていたが、携帯トイレの備えが必要だとわかった」「災害時のトイレについて何も知らなかったが、どう行動すべきかを知ることができた」「具体的でとてもわかりやすくイメージでき、普段疑問に思っていたことも解決できました」「備蓄している携帯トイレの数が足りないことに気づいた」「断水したらお風呂の水で流すつもりだったが、流せなくなる可能性もあることを知った」「緊急時に手元に携帯トイレがない場合にどう工夫するかも知りたかった」「携帯トイレや仮設トイレの使い方エチケットも共有するべきだと思う」

9月2日(土)・3日(日)
令和5年度 東京都・東村山市合同総合防災訓練

東京都総合防災訓練とは

東京都は「災害対策基本法」「国民保護のための法律」「東京都地域防災計画」「その他各種規定」「過去の災害や訓練成果」を踏まえ、都民の防災意識を高め、防災関係機関の応急対策の確認と検証、防災関係機関の連携強化を目的として、総合的な防災訓練を実施しています。また、区部の木造住宅密集地域、多摩地域の土砂災害、沿岸部における津波からの迅速な住民避難などを想定し、区部と市部を隔年で実施しています。

2023年度は「発災後100年の節目を迎える関東大震災の教訓」「防災分野におけるデジタル化(防災DX)」を統一テーマにして実践的な訓練を実施。コープ災害ボランティアネットワークと東京都生協連は今年度も様々な訓練に参加しました。

9月3日 東村山市防災まち歩き

東村山市社会福祉協議会を中心に、北多摩北部ブロック社協と東京都災害ボランティアアクションプラン推進会議が実施した防災まち歩きに、CO災ボ幹事2名がリアルまち歩きにファシリテーターとして参加協力しました。

当日は3コースのまち歩きを中継で結び、オンラインでもリアルタイムで参加できる企画としました。また、東京都災害ボランティアセンターのブースでの展示に参加し、東京都生協連とCO災ボの活動を紹介しました。

空堀川コース

大岱小学校→丸山橋雨量観測所→本町児童館(防災無線)→都営住宅7号棟生活だんらん室(お話を聴く)→貯水槽(消防水利説明)→ほんちょうケアセンター



紙芝居でポイントを説明

東村山駅東口コース

駅前の志村けん像→災害用井戸(市内に94カ所)→東村山シルバーセンター(お話を聴く)→むさしのiタウン(旧都営住宅跡地)→ほんちょうケアセンター



災害用井戸。昭和22年に掘り昭和35年まで生活用水として使用。

訓練の被害想定

「首都直下地震等による東京の被害想定報告書」に基づき、想定される最大の被害を設定。

- 対象地域：東村山市およびその他の地域
- 多摩東部直下地震
- マグニチュード 7.3
最大震度 7
- 冬の18時
- 風速 8m/秒



ヘリコプターでの救助訓練も実施。



「むさしのiタウン」は戸建住宅の無電柱化のまち。公園にかまどベンチ。

訓練会場コース

コンビニ→病院→消火器・防火水槽・消火栓→警察署→天王森公園
初心者や長い距離を歩くことができない人でも参加できる短いコースです。



ほんちょうケアセンター(福祉避難所)の村山苑でお話を聴く。



本部スタジオ
左から、進行の西東京レスキューバードの荘さん、災害サポート東京の福田さん、東村山ボランティアセンターの花田さん

9月3日(日)天王森公園での展示訓練

東京都生協連が「関東大震災100年 賀川豊彦から受け継ぐ生協活動」と題して出展しました。

協同組合の父といわれる賀川豊彦の活動と、災害支援の精神が近年の生協の活動にも継承されているということを紹介したパネルの展示と、クイズ用紙だけでなくオンラインでも参加できる、こくみん共済coopの「親子で学べる防災クイズ」や日本トイレ研究所「災害トイレクイズ」を実施しました。猛暑の中でしたが、300人が参加してくださいました。



クイズ用紙も配布し、多くの方が来て参加してくださいました。



多くの親子がiPadを使いオンラインクイズに参加しました。

こくみん共済coopに提供していただいた「5年使えるウェットティッシュ」をプレゼント。好評でした。



9月3日(日)医療救護訓練

「緊急医療救護所の立ち上げ」「傷病者に対するトリアージ」「運搬訓練」に、西都保健生協の看護師2名と東京都生協連2名が参加しました。救出救助訓練と連動し、搬送された重傷者・中等症者をエリアに分け、応急処置、拠点病院や連携病院への搬送要請訓練を実施しました。仮想傷病者は特殊メイクで創傷を施し、受傷状況を共有でき臨場感のある訓練となりました。初対面の参加者が協力しながら情報交換し、様々なことに対応する訓練は貴重な体験となりました。今年は看護学生が患者役を務めるだけでなく、医師や看護師の対応も学びました。

また、隣接する救出救助活動訓練といっしょに、地震発生時に身を守る「シェイクアウト訓練」にも参加しました。



傷病者を担架で搬送



傷病者一覧表に記録



応急処置の実施

9月2日(土)緊急支援物資輸送・標章発行訓練

今年度はパルシステム東京と生活クラブ生協東京、東京都生協連が参加。交通規制された道路を走行するための緊急通行車両標章の発行訓練では、「緊急通行車両等事前届出済証」が発行されていない場合の手続きを訓練しました。また、発行の制度改正について説明を受けました。



発行された緊急通行車両標章

MCA 無線により東京都からの物資要請を東京都生協連が受けて、パルシステム東京と生活クラブ生協東京に発注。東京都多摩広域防災倉庫から東村山スポーツセンターへ物資を搬送しました。



多摩広域防災倉庫でのトラックへの積み込み作業。



東村山スポーツセンターで東村山市による物資の受け入れ。

4年ぶりの防災訓練は、関東大震災100年をテーマに入場規制など新型コロナ感染対策が緩和されて開催されました。都市型の震災として100年を経過しても学ぶべきことは多く、工夫や教訓は現在の防災や減災に生かされなければなりません。学習会やイベントなどがあれば積極的に参加し、震災から命を守る術を身に付けましょう。



コラム by 中村幹事

近くの人とつながっていますか？

8月に開催されたトイレについてのオープン講座ではトイレについて学びました。講座の中で講師から災害時にトイレを使えなくなったらどうしますか？という問いかけがありました。以前は下水が本管ならば直接使えるといわれていましたが、今は排泄物を流さずに家で保管が大前提。処理施設のどこか1か所でも不具合が起きているとトイレは使えません。

2023年7月に開催したCO災ボ総会後の学習会でも、「+ONE（プラスワン）プログラム」のお題をつくるワークショップを実施したところ、できたお題一つに「大震災の後、マンションの1階に住む私の家のトイレに汚水が溢れてきた。あなたはどうする？」というものがありました。上の階の方に一人で話に行くという方、家を諦めて避難所に行くという方、いろいろな意見が出ました。会員の皆さんは同じマンションの方や近隣の方と災害時のトイレについて話したことはありますか。

防災訓練というと避難所設営などに目が行きがちです。それも大切ですが、近くの人と災害時のトイレの話ができるような関係を、普段から作っておく事が減災の一歩だと思います。